

新型コロナワクチン小児用（5-11歳）

このワクチンは、ファイザー社製で、成分としては大人のワクチンとほぼ同じ、接種量が大人の3分の1に減量されています。12歳以上の若い大人用のワクチンより、明らかに副反応は少ないとされています。たとえば、アメリカでは、すでに子どもに対して870万回もの接種が行われ、発熱は、1回目で7.9%、2回目でも13.4%でした。心配される心筋炎も11件と、若年成人と比べて大変少なくなっており、全員軽症で治癒しています。

心筋炎に関してはワクチン接種後よりも感染後の方がはるかに高い発症率になり、重症になります。また、接種部位の腫れや痛みも、大人よりもやや少ないようです。

*小児の新型コロナウイルス感染症、特にオミクロン株は、症状があるとしても発熱と咳程度のことが多いです。しかし感染した子どもの中には酸素投与や人工呼吸を必要としたり、感染後の後遺症で苦しんでいる場合もあります。

また、次の新たな変異株が出現することは予想しておかなければなりません。それが子どもたちで軽症であるという保証はまったくありません。現在のワクチンは、元の野生株に対するワクチンですが、今までに出現した変異株のうち、アルファ、デルタには感染予防効果や重症化予防効果が、オミクロン株についても重症化予防効果が認められています。基礎疾患のある子どもさんはぜひ接種をお勧めします。健康な子どもたちにとっても、将来の潜在的なリスクへの備えとしてワクチン接種は必要と考えられます。

<子どもたちの新型コロナウイルスによる風邪を防ぐ以外の目的>

*もうひとつの接種を勧める大きな理由は、社会的な理由です。今の子どもたちは、部活動で誰かが感染したら試合に出られない、学年で誰かが感染したら合宿は中止になる、受験の日に感染していたら不利になる、子どもが感染したら親は濃厚接触者となり仕事にいけなくなる・・・自分が感染したら学級閉鎖になってしまうといった心配と、さまざまな社会的プレッシャーにさらされています。ワクチン接種はこれらから逃れるために、あるいはリスクを減らすためという目的もあります。

*また、オミクロン株とはいえ高齢者がかかると、重症化する方が認められます。家族を守るという意味合いもあります。

★自然にかかること、すなわち野生のウイルスを体に入れることは、一番危険なワクチンを受けるようなものです。ワクチンがない時には、その病気に対する免疫を付ける方法は自然にかかることしかありません。しかし、これは危険すぎるから、多くのお金をかけて、ワクチンが開発されたのです。メッセンジャーRNA (mRNA) ワクチンが今のワクチンの主流です。mRNAは体内で増えることはないのです、ワクチンによる長期的な影響はほぼゼロです。新型コロナウイルスの表面のトゲトゲ（スパイク蛋白）部分を作る設計図としての役割をし、一定数のスパイク蛋白を作ると、その役目を終えて、短時間で壊されてなくなります。人の細胞の核にも入りませんので、ワクチンを受けた人の遺伝子を変えることは絶対にありません。それに対し自然感染のウイルス遺伝子は非常に勢いで増殖します。このように、体の中で増えて、病気を起こし、周りの人にうつすことになる自然の危険な新型コロナウイルスに感染するのと、病気を起こさず、勝手に増えもせず、その働きや動きがかなりわかっている安全なワクチンを受けるのと、どちらが安全なのか、言うまでもないと思います。

文月会原医院

